

《論 説》

古典期アテナイの職人に関する一考察

杉 本 陽奈子

【要旨】

古代ギリシアにおいてポリスの中核を担っていたのは、農民であった。これに対し、職人の多くは外国人や奴隷であり、手工業は市民にはふさわしくない俗業として蔑視の対象となっていた。古典期アテナイの文献史料を根拠にこのような傾向が指摘される一方で、職人の中にはアテナイ市民も含まれていたことが確認されている。本稿は、「移動」と「定住」という観点から、市民権の有無にかかわらず共通する職人の性質を導き出し、彼らが位置していた世界を意味する概念として、「職人の世界」を設定する。さらに、職人を指す言葉のうち、職人蔑視を考察する上で最大の手がかりとなる「バナウソス」に注目し、この言葉が哲学者作品以外ではほとんど用いられていない理由について検討する。「職人の世界」が接近するという特殊な状況にあった古典期アテナイにおいて、同時に「バナウソス」が用いられなくなっていくことは、職人に対する不信感が薄れたことを意味すると考えられる。古典期アテナイの人々は、閉鎖的な市民団を形成する一方で、「職人の世界」を受け入れる開放性を有していたのである。

はじめに

古代ギリシア社会は農業を基盤としており、ポリスにおいて市民権を持ち国家体制の中核の要素となっていたのは、主に農民であった。また、各ポリスは市民を中心に様々な身分から成り、代表的なポリスの一つであるアテナイは、市民、メトイコイ、奴隷などによって構成されていた。メトイコイとは一定期間以上特定のポリスに滞在する在留外人であり、奴隷と異なり自由人であるにもかかわらず、市民が持つ権利のほとんどを認められていなかった。とりわけアテナイにおける土地所有権（エンクテシス）を持たないメトイコイは、その大多数が商工業に従事していたと考えられる¹⁾。

商業・手工業はそれぞれ、メトイコイや奴隷が従事すべき俗業であり市民にはふさわしくないとして、アテナイをはじめ多くのポリスにおいて蔑視の対象とされた²⁾。しかしながら、市民でありながら商工業に従事していた人々の存在も史料の中に確認することができる。彼らは当然市民としての諸権利を持つものの、実際には田園部に土地を持たず、基本的に都市部で生活していたと思われる³⁾。

古典期アテナイの特徴が閉鎖的な市民団の形成とされる一方、このように考えると商工業

従事者の間には、市民権の有無にかかわらず共通する性質を持つ存在として、市民と非市民の接点を見出すことができるように思われる。その中でも特に手工業従事者、すなわち職人は、特定のポリスに一定期間以上滞在することにより、ある程度他のポリス構成員との関係を築いていたと考えられる。つまり、法制度を重視する解釈では明らかにされてこなかった、ポリス内部での日常的な意識における閉鎖性あるいは開放性を考える上で、職人をめぐる状況に注目する意義は極めて大きいと言える。

そこで本稿では、主として古典期アテナイにおける職人、とりわけ職人に対する蔑視の実態について考察したい。古典期アテナイは史料に恵まれており、各分野での研究の蓄積が豊富である。また、職人蔑視という現象は、人々の他者に対する意識を最もよく表す例の一つであると考えられる。これらが、考察対象を以上のように定めた理由である。

以下では、まず第1章において、本稿で扱う「職人」を定義する。次に第2章では、職人に関する先行研究を概観し、問題の所在を明らかにする。第3章では、先行研究から浮かび上がる職人像を総合的にとらえ、職人の性質を導き出す。そして第4章で、職人蔑視の実態について考察する。その上で、市民権を持つ農民に対するアウトサイダーとして位置づけられ、その枠組みの中で理解されてきた従来の職人像の修正を試みる。さらには、市民権とその閉鎖性のみを絶対的な基準とすることのないポリス解釈の可能性を示すことを、最終的な目標とする。

第1章 職人の定義

従来の研究で「職人」あるいは「手工業者」として扱われてきた人々に対しては、様々なギリシア語の呼び名が存在していた⁴⁾。ここではその主な例として、次の四つを挙げる。一つ目は、「デミウルゴス (δημιουργός または δημοεργός)」である。「デミウルゴス」は「共同体のための働き手」が原義であるが、イオニア・アテナイでは「共同体のための」の意味が薄れ、単に「働き手」特に職人を指す言葉となった⁵⁾。また、古典期に限らずホメロス作品でも用いられていることから、旧来の呼び方とされている。二つ目は「ケイロテクネス (χειροτέχνης)」で「手の技に従う者」を意味している⁶⁾。三つ目は「テクニテス (τεχνίτης)」で、「技術で生計を立てる者」という意味で用いられる言葉である⁷⁾。

注目すべきは、四つ目の「バナウソス (βαναισος)」である。「バナウソス」は「炬 (βαῦνος)」が語源とされる言葉で、しばしば「俗業者⁸⁾」と訳される、職人に対する蔑視の意味を込めた呼び方である。後述の通り、初出がソポクレスの『アイアス』であることから、前5世紀以降に普及した言葉と考えられている。また、類義語としては、手工業自体に蔑視の意味を込めた「バナウシア (βαναυσία)」, その形容詞形「バナウシコス (βαναυσικός)」が存在する。

ここで、これら複数の呼び名の用法について簡単に整理しておく。まず、「デミウルゴス」,

「ケイロテクネス」、「テクニテス」は基本的に同義語として用いられており、個々の作品においてすら、厳密な使い分けが行われたかどうかは曖昧である。これに対し、「バナウソス」はその言葉自体に蔑視の意味が含まれているという点で、これら三つの言葉とは異なっている。ただし、この点を除けば他の三つの言葉とほぼ同義語として用いられていることから、「バナウソス」とは、職人全体を蔑視の対象とする言葉であると考えてよい。職人への主要な呼び名に対する以上のような理解は、研究者の間ではほぼ一致していると思われる⁹⁾、筆者もまた同じ見解であるため、以下ではこれらを前提として議論を進めたい。

この他にも個別の職業を指す傾向にある言葉を含めると、職人を表す呼び名は実に多様であったと言える。ここからも窺われるように、職人とは非常に定義しづらい存在であり、おそらく古代ギリシア世界においても厳密な区分は定められていなかったように思われる。また、「ケイロテクネス」及び「テクニテス」に含まれている「テクネ (τέχνη)」とは広く技術を表す言葉で、手工業に限らず医術、弁論術あるいは卜占術なども指すことがある¹⁰⁾。従って、職人を指す言葉として以上で紹介した四つの言葉についても、必ずしも手工業者のみを示すわけではなかったと考えられる。

とはいえ、実際にはこれらの言葉が用いられる例の多くが、今日我々が手工業者として認識している職種を想定していたことは明らかである。また、考察を進めるためには、対象を限定することが必要であろう。そのため、本稿では特に手工業者に考察の対象を限定したい。しかしながら、手工業者に関して導き出された性質は、広義の職人についてもある程度当てはまるものであると考える¹¹⁾。

以上を踏まえ、本稿で扱う職人については、次のように定義する。すなわち、「テクネのうち手工業によって生計を立てる者」である。以下では、この定義に基づいて「職人」の言葉を使用する。より具体的には、このように定義した職人には、靴職人、大工、造船職人、織工、石工、鍛冶工、陶工、画家、彫刻家などが含まれる¹²⁾。

第2章 職人に関する先行研究

職人に関する研究は幅広い分野にまたがっている。以下では、メトイコイとしての職人、非農業従事者としての職人、美術史における職人、という間接的な職人研究と、より直接的な職人研究とに分けて先行研究を概観し、その問題点を確認する。

第1節 間接的な職人研究

メトイコイとしての職人を考える上で、まず挙げるべき研究者はホワイトヘッドであろう。彼は1977年の著書の中で、アテナイのメトイコイを市民団とはっきり区別し、その上でメトイコイに関する諸問題を広く取り上げている。しかしながら、ホワイトヘッドはメトイコイの具体的な生活や職業人としての側面にはあまり言及しておらず、職人に関しても、

全ての商工業者がメトイコイというわけではない、との見解を述べるにとどまっている¹³⁾。

メトイコイ職人が政治史との関連から言及される数少ない例として、反寡頭派戦争¹⁴⁾がある。反寡頭派戦争とは、ペロポネソス戦争敗北後の寡頭政「三十人僭主」政権を打倒するため、トラシュブロスを中心として始まった内戦である。この戦いでは、数多くのメトイコイが反寡頭派の市民とともに活躍し、彼らの功績は民主政回復後に高く評価された。その顕彰碑文の一部とされるものの断片を再構成したクレンツによれば、そこに挙げられたメトイコイのうち、約69人の職業が判断可能である。その内訳を見ると、農業19人、工業31人、商業19人であり、特に工業従事者の活躍が目立つ¹⁵⁾。

クレンツの研究を踏まえた上で、アテナイにおけるメトイコイの位置づけについて考察したのが、桜井万里子氏である。桜井氏は、内戦で功績のあったメトイコイが一時的に市民権すら与えられた背景に、活発な経済活動や都市での混交による、非市民に対する市民の意識の変化が存在したことを確認する。ただし決議破棄によってその意識的变化が後退したことから、メトイコイはすべて市民共同体から排除されていたことがわかる、と述べている¹⁶⁾。

このように、メトイコイ職人を扱った研究であっても、そこで注目されてきたのは、市民団に対する他者としてのメトイコイであった。言い換えるならば、ここには、メトイコイすなわち商工業者に対し、市民団とはすなわち農民である、との前提が存在しているように思われる。しかしながら、市民が必ずしも農民ではなかったことを考えるならば、職業という観点での市民と非市民との混交にも目を向ける必要がある。

次に、非農業従事者としての職人に関する研究を挙げる。非農業従事者については、従来全く言及されてこなかったわけではないものの¹⁷⁾、農業従事者と比べその重要性はほとんど見出されていなかった。しかしながら近年、このような状況が変わりつつあると言える。例えば、ハリスは経済史的な問題意識から、古典期を中心とする前500年から前250年のアテナイの史料に見られる職業の収集を行い、現段階で約170もの職業を確認している¹⁸⁾。そして、こうした非農業分野の職業の多さに加え、古典期アテナイでは非農業人口が決して少なくなかったことを挙げ、非農業分野の規模を過小評価すべきではないと主張する¹⁹⁾。また併せて、アテナイの作業場や店は定期市ではなく、常設であったとの見解を述べている²⁰⁾。

ハリスの研究を積極的に取り入れた上で、市民、メトイコイ、奴隷の区別はアテナイでは難しいと主張するのがヴラソプーロスである²¹⁾。彼によれば、これら三つの身分はアテナイ民主政の機能と結びつき、相互に影響し合う文化を形成していた。その理由として挙げられているもののうち特筆すべきは、アテナイ民主政は単に制度の中で行われていたわけではない、という視点である。非制度的なものが市民だけでなく全ての人に開かれていたことを示す例として、ヴラソプーロスは、時に群衆に混ざり、時に作業場に座ることで、アゴラにおいて市民以外も主体となり得る議論が行われていたという、いくつかの史料に見られる状況を挙げている。また、平均的なアテナイ市民はほとんど民会や法廷で発言をしておらず、アゴラでの議論こそが政治的見解やアイデンティティを形成していたとする²²⁾。彼の説は、

市民、メトイコイ、奴隷という法制度上の区別を常に絶対的と考える従來說に対し大きな見直しを迫るものとして評価することができる。

以上の研究では、非農業従事者の存在に注目することの必要性が主張されている。同時に、市民であっても農業以外に従事する人々の存在が大きく取り上げられており、市民権にとらわれないギリシア史研究の重要性が指摘されている。

美術史における職人については、マクドナルドの研究が興味深い。彼は、前5世紀後半に壺の様式が変化したことから、この時期にアテナイから他ポリスへ陶工が移動した可能性が高いとし、その原因としてペロポネソス戦争による影響を挙げる²³⁾。また、我が国では芳賀京子氏が優れた研究を行っている。芳賀氏は前6世紀後半から後3世紀の署名・様式の特徴について通時的考察を行い、アッティカ派の彫刻家リストを提示する²⁴⁾。そこからは、特に古典期に、アテナイ人彫刻家がアッティカ内外で活動していることが読み取れる。

職人の活動に関しては、直接の記録が残ることがほとんどない。しかしながら、このように美術史的な問題意識からなされた分析によって、文献史料の限界を超えた研究が可能になると思われる。

第2節 直接的な職人研究

職人について直接的に考察した研究としてまず挙げられるのが、ランドルによるエレクトイオン神殿の建築碑文の分析である。彼は碑文に現れる職人107人のうち身分が確認できる者の内訳を、市民24人、メトイコイ42人、奴隷20人とする²⁵⁾。ランドルの研究及び自身のパルテノン神殿の建築碑文に関する研究²⁶⁾を踏まえた上で、ギリシア・ローマ時代の職人について幅広く考察したのがバーフォードである。彼女は、アテナイでは、職人であっても市民権を持っていれば公的権利を保証されていたと主張している²⁷⁾。これらの研究をうけて、近年では、フェイエルが職人の同質性について考察している²⁸⁾。彼は四つの主要な神殿であるデルポイ、デロス、エピダウロス、エレクトイオンの建築碑文を分析した結果、古代ギリシアの職人は同質な人々とは言えない、との結論に達している²⁹⁾。

同じくランドルの研究成果を取り入れ、特に市民身分である職人の社会的地位に関する考察を行ったのが、伊藤貞夫氏である。伊藤氏はその際、職人蔑視は奴隷制度の影響によるものであるという説を前提としている³⁰⁾。さらに、エレクトイオン建築碑文に記された市民の原籍の分布から、田園部出身の者が、何らかの理由で都市部に出て職人になった可能性があるとの見解を示している³¹⁾。

以上のように、直接的な職人研究では、神殿の建築碑文の分析を中心として考察が進められることが多い。これは建築碑文が、職人の具体的な賃金や身分構成など、文献史料からは判明しづらい状況を明らかにする上で、最大の手がかりであると考えられているためである³²⁾。

一方で、これらとは別の観点から行われた職人研究もいくつか見られる。まず、わが国で

は村川堅太郎氏が、「デミウルゴス」の言葉が持つ市の高官と職人の二義について、極めて説得力のある解釈を提示している³³⁾。また、藤縄謙三氏は職人の社会的地位について文献史料に基づく考察を行い、職人蔑視は古代世界に普遍的に見られるとした上で、その中でのギリシアの特徴は、普通の市民からなる共同体に対しデミウルゴスが奉仕者として存在する体制である、と述べている³⁴⁾。前述の伊藤氏の研究は神殿という特殊な事例を扱っているとして、これに対し通常の職人の生活を概観しようと試みたのが、豊田和二氏である。豊田氏はアゴラの発掘による考古資料をもとに、一般的な作業場は小規模であったとの結論に達している³⁵⁾。技術及び技術者に対する蔑視について、特に医術を中心とした考察から、近年興味深い視点を提示したのがクオモである。彼は、技術者が社会に必要な不可欠な存在であること、技術は生まれや社会的地位にかかわらず習得できること、神話において人間に火を与えたとされるプロメテウスが変化の象徴であることを挙げ、技術・技術者は変化を引き起こし得る危険な存在の象徴として蔑視された、と主張する³⁶⁾。

このように、職人研究において見出される論点は多様かつ散在している³⁷⁾。さらに、一般的な職人について考察した研究の多くは、職人を時間的・空間的に大きな枠組みでしかとらえていない。これに対し、職人が実際に置かれた状況は、古典期アテナイといった特定時期の特定ポリスの特徴を反映したものであったと考えられる。つまり、古代ギリシアあるいは古代世界全体に共通する職人の性質を考察対象としているこれらの研究は、職人の実態という点については、分析が不完全であると言わざるを得ない。また、考察の対象を限定し、古典期アテナイの特徴を踏まえている研究であっても、そこで扱われている職人の性質は市民権の有無で区別されてしまっている。しかしながら、前述の通り、職人の性質を明らかにするためには市民権にとらわれた考察を行うべきではない。

従って、市民権の有無にかかわらず職人に共通する性質を、古典期アテナイの枠組みの中に位置づけるといふ、未だ完全にはなされていない考察が必要であると言える。そこで第3章では、まず、古代ギリシア世界における職人の性質を二つの観点から導き出す。そして、それらが市民権の有無にかかわらない性質であることを確認した上で、古典期アテナイに考察の対象を限定し、そこでの職人をめぐる状況の特殊性について分析する。

第3章 職人の性質

第2章で概観した通り、職人についての研究は多角的に行われており、その結果、複数の職人像が浮かび上がっている状況にある。それらを総合すると、特定のポリスとの関わり方という観点から見た場合、職人の性質は「定住」と「移動」の二つに大別できるように思われる。以下では、それぞれの性質について検討する。

第1節 定住する職人

定住する職人とは、ここでは中長期的にポリスに滞在する職人、すなわち、そのポリスに生まれ育った者はもちろん、他ポリス出身でありながら移住してきた職人のことをも指す。こうした職人は基本的にそのポリスに滞在し、短期間の移動があっても戻ってくる人々である。

ソクラテスの父親ソプロニスコスが石工であったことはよく知られている。ソクラテスに関する記述や、そこからわかる人間関係を見る限り、ソプロニスコスがアテナイに基盤を置く職人であったことは明らかである³⁸⁾。またソクラテス自身については、彼がアゴラ付近の職人の作業場をしばしば訪ね、そこで議論を行ったという逸話が伝えられている³⁹⁾。靴職人シモン⁴⁰⁾をはじめとするこのような職人たちは、ソクラテスだけでなくアテナイで生活する多くの人々と関係を築いていたと考えられることから、中長期的にアテナイに滞在していた可能性が高い。

定住する職人の存在は、考古学的な調査からも確認することができる。例えば、アゴラの発掘によって、前450年から前410年頃にわたって営業していたとみられる靴屋の跡が発見されている。そして興味深いことに、その小屋があった場所のすぐ外から、シモンという名が底に刻まれた酒杯の破片が出土している⁴¹⁾。もちろん、これがソクラテスと議論したシモンと同一人物であると断定することはできない。しかしながら、約40年間同じ場所に靴屋があり、そしてそれがおそらく一人の人物またはその家族によって営まれていた、ということは注目に値する。また、前5世紀半ば頃アゴラの南西に建てられたとされる鍛冶工の住宅跡からは、複数の鍛冶工や彼らに関係すると思われるメトイコイに向けられた、呪詛銘板が出土している⁴²⁾。このような複雑な人間関係が形成されていることも、アゴラ付近の職人がある程度長い期間アテナイで生活していたことを示している。

このように、定住する職人の姿は、文献史料と考古資料の両方において見出すことができる。これらに基づいた研究は数多くなされているが、特に注目すべきは、ポリスにおける非農業従事者の重要性を評価しようとする近年の流れである。例えば、ハリスが明らかにしたように、非農業人口が少なくなかったことや、作業場や店が常設であったことから、都市の中には常に一定数の職人がいたと考えられる⁴³⁾。またヴラソプーロスは、職人を含めた非農業従事者やメトイコイがアゴラにおいて一般市民とともに議論に参加している状況を挙げた上で、民主政下では、アゴラでの活発な議論が、間接的にはあれ政治に対し影響力を持ち得たとの見解を示している⁴⁴⁾。

あるいは、反寡頭派戦争で市民とともに戦ったメトイコイが存在すること、そしてそのうち職人が高い割合を占めていること⁴⁵⁾は、次のように解釈できるかもしれない。すなわち、彼らは、外国人であるにもかかわらず民主政回復をめざす戦いに参加するほど、ポリスに根付いたメトイコイ職人の例である、と言えるのではないだろうか。

このように、職人たちは定住することによって、一般市民と様々な局面で接点を持ってい

た。特に古典期アテナイにおいては、一定の政治的議論を行う能力も含め、一般市民とほとんど変わらない生活を送っていたと考えられる。つまり、古典期アテナイに定住する職人たちは、経済史的な議論で言及されるような、ポリスに対する経済的貢献⁴⁶⁾という面でのみポリスの構成要素となっていたのではなく、日常生活においてもまた、ポリスの中に組み込まれていた、とすることができる。

第2節 移動する職人

移動する職人とは、需要に応じて移動する職人を指す。こうした人々には、常に移動して生計を立てるいわゆる渡り職人⁴⁷⁾だけでなく、他ポリスに生活の基盤を置きつつ特定ポリスへ短期的な移動を行う職人や、特定ポリスから他ポリスに生活の基盤を移すために移動する職人も含まれる。

具体的には、まず神殿建築に携わる職人の例が挙げられる。例えば、エレクトイオン神殿の建築に携わった職人のうち約半数はメトイコイであった。ランドルの研究では、神殿建築のために移動してくるメトイコイと、普段からアテナイに滞在しているメトイコイとがどの程度の比率であったのかは明らかにされていない⁴⁸⁾。ただし、神殿建築には高度な専門技術を持つ職人が必要であること、そして一つのポリスに属する熟練職人の数は限られていること⁴⁹⁾から、特に大規模な建築工事を行う際には、他ポリスに基盤を持つ職人が多数移動してくる状況が一般的であったと考えられる。また、神殿建築といった公共事業に限らなくとも、アテナイにメトイコイ職人が数多く存在していること自体、職人たちが働き場所を求めて他ポリスから移動してきたことを示している。

反対に、アテナイから他ポリスへ移動した職人の存在も確認されている。例えば、マクドナルドが示した⁵⁰⁾、前5世紀後半の陶工の移住などは、アテナイに基盤を置いていた職人が他ポリスへ移動した、典型的な例と言えよう。また、芳賀氏の研究からは、古典期アテナイの市民権を持つと考えられる彫刻家が、他ポリスでも活動している例⁵¹⁾が明らかにされている。文献史料に基づく研究では、アテナイ市民権を有する職人の移動が注目されることは、ほとんどなかった。そのため、市民権の有無にかかわらず職人に共通する性質を考える上で、以上のような美術史的な観点からの研究は、特に注目に値する。

職人の移動はギリシア世界内にとどまらない。アケメネス朝ペルシアの王宮では、多くの渡り職人や東方ギリシア人が働いていたと言われる⁵²⁾。もちろん、彼らの大半は被征服民であった。しかしながら、専門的職場を求めてやってきた少数の熟練職人は、比較的自由に故郷とペルシアとの間を移動できたと考えられる⁵³⁾。

以上の例に加え、職人の需要と供給が常に変動することを考慮するならば、おそらく古代ギリシア世界における職人は、たとえアテナイ市民権を持つ職人であっても、極めて活発に移動を行っていたと想像することができる。では、特に古典期アテナイにおいて、職人はどの程度自由に行動することができたのだろうか。

考古学的な調査から、ポリスにおける一般的な作業場はかなり小規模であったことが明らかにされている⁵⁴⁾。従って、職人は大規模な集団としてまとまっていたわけではなく、個別に存在していたことがわかる。また、古代ギリシアにおいては職人が団結して労働組合を作ることや、法制度上の一つの身分として存在することは全くなかった⁵⁵⁾。職人たちが同質な存在ではなく、まとまった集団を形成していないということは、すなわち、彼らは国家がコントロールできない存在であった、ということでもある。これらを踏まえると、古代ギリシアの職人は、ほとんど国家による制約を受けることなく⁵⁶⁾自由に移動することができたと考えられる。

第3節 職人の世界

第2節で確認したように、職人たちはその性質上、ポリス、さらにはギリシア世界すら越えて自由に移動し得る存在であり、その意味で一般市民とは異なっていた。このような状況は、やや抽象的な表現をするならば次のように言い換えられる。すなわち、職人は、一般市民とは別の次元に位置し、その次元に基づいて行動する存在であった。以下では、職人が位置するこの特殊な次元のことを「職人の世界」と呼びたい。もちろん、古代ギリシアにおいてこのような「職人の世界」がはっきりと認識されていたかどうかは判然としませんが、少なくとも、職人たちは一般市民にとって、明らかに異質な存在であった、とすることができよう。

以上で考察した「定住」と「移動」は、市民権の有無にかかわらず職人全般に見られる、二種類の性質である。これらは一見矛盾するようであるが、職人はたとえ定住していても、農民と異なり土地に縛られていないため、潜在的に移動する可能性を秘めている。つまり、定住する職人もまた「職人の世界」に位置している。あるいは反対に、職人は移動する性質を持っているにもかかわらず、需要がある限り特定のポリスに定住することが可能である。従って、個々の職人は自由人であれば、定住する職人と移動する職人のいずれにもなり得る存在であると言える。

このような二種類の性質を踏まえると、古典期アテナイにおける職人とポリスとの関係は、次のようにまとめることができる。職人はその性質上、「職人の世界」に基づいてポリス間を自由に移動する、一般市民にとって異質な存在であった。これ自体は古くからギリシア世界の職人にはほぼ共通する性質であったと思われる。ところが、古典期に経済的發展を遂げたアテナイには、多くの職人が集まることとなった。さらに、それらの職人は、民主政というアテナイの政治形態においてポリスの構成要素として受け入れられ、日常的には一般市民とあまり変わらない生活を送っていた。すなわち古典期アテナイは、本来異質であるはずの職人が、一般市民の世界に接近している特殊な状況であったと言える。

このように、古典期に入りポリスと職人との関係が変わったことに伴い、人々の職人に対する意識にも何らかの変化があった可能性が高いのではないだろうか。第4章では、この点

に注目し、一般人における職人蔑視の実態を考察する。同時に、哲学者によって職人が蔑視された意味についても一つの解釈を提示したい。

第4章 職人蔑視に関する考察

第1節 従来の職人蔑視解釈とその問題点

いわゆる職人蔑視の中には、様々な質の違う蔑視が含まれていると考えられる。しかしながら、従来の研究は、そのような質の違いに言及することはほとんどなかったと言ってよい。そこで以下では、職人蔑視を構成していた諸要素を分析しながら先行研究を整理し、さらなる考察の必要性を明らかにしたい。なお、本稿では、哲学者ではない人々のことを「一般人」とするのに対し、職人と異なり田園部に土地を所有する市民との意味で「一般市民」を用い、区別して表記する。ただし、これら二つの集団の中核的構成員は、ほぼ同一であると考えられる。

職人に対する蔑視は、史料に恵まれている古典期アテナイにおいて数多く見出すことができる。例えば、クセノポンの『家政論』に次のような記述がある。

「職工と言われる人達の仕事は良く言われていないし、当然だが、^{ボリス}都市の中でひどく軽んじられている。それというのも、その仕事に携わっていると体をこわしてしまうからなんだ、どうしても座ったまま、薄暗いところすごさなければならないし、時には一日中火のそばに居なければならないからだ。そうしていると体は疲れ切ってしまい、心もまるで無気力になってしまう。それに時間の余裕が全くないから、友人達のことや国家のことにかかわってられないんだよ、いわゆる職人仕事はね。それで、この手の職人達は、友人とのつき合いは悪いし、国を守る気概にも欠けているとみなされているのだ。」⁵⁷⁾

この箇所については、職人には時間的余裕がないため市民として劣ると考えられていた、と理解する⁵⁸⁾ほかに、日焼けした力強い身体に比べて屋内で働く職人の姿は惨めなものとなみなされた、と解釈することが研究者の間で一般的であるように思われる⁵⁹⁾。もちろん全ての職人が屋内で作業するわけではないため⁶⁰⁾、ここで挙げられた職人は、おそらく陶工や靴職人などを想定していると考えられる。しかしながら、屋内で働く職人に限らなくとも、職人が泥にまみれながら働く姿や、そもそも肉体労働を行うこと自体が、貧民のイメージに直結した可能性はある。あるいは藤縄氏が考えるように、職人はデミウルゴスの語源通り奉仕者として、一般市民に劣る存在ととらえられていたかもしれない⁶¹⁾。

ところで、これらはいずれも、ギリシア世界にほぼ共通するとされる価値観に即した職人蔑視解釈である。あるいは、貧民のイメージに由来する蔑視などは、ギリシアに限らず普遍

的な現象と言えるかもしれない。言い換えるならば、これらの解釈の中には、古典期アテナイに独特の蔑視を見出すことはできない。

これに対し、職人蔑視の古典期アテナイの特徴が説明されているものとして、奴隸制発達に伴い蔑視が強まった、という見解がある⁶²⁾。すなわち、古典期アテナイで奴隸制が発達したことによって、手工業は奴隷が行う仕事であるとのイメージが定着し、そのことによって職人が蔑視されるようになった、というものである。その際、しばしば言及される史料に、次のようなものがある。

「むかしの時代には、ある国々では、手職人は奴隷か外国人であった。現今においても、多くの手職人がこの種の者であるのは、そのためである。しかし最善の国であれば手職人を市民にすることはあるまい。」⁶³⁾

アリストテレス『政治学』のこの記述からは、確かに、手工業は市民の行うべきでない卑しい仕事だというアリストテレスの主張が読み取れる。しかしながら、「最善の国であれば手職人を市民にすることはあるまい」ということは、手工業は市民にとってふさわしくない俗業であるからこそ、非市民に委ねられるべきである、ということの意味すると考えられる。つまり、非市民、特に奴隷が手工業に従事しているかどうかにかかわらず、すでに前提として職人に対する蔑視が存在していることが窺われる。

また、奴隷が職人として働く場合、その多くは大規模製作場で使役されたと考えられ⁶⁴⁾、これは労働者がほぼ奴隷だけに限定された特殊なケースであると言える。さらに、他の史料を総合してみると、市民を含む自由人職人が多数存在していたことは明らかであり、職人といえば奴隷を指すような状況では全くなかったことは、多くの研究者が認めているところである⁶⁵⁾。あるいは、そもそも奴隷のイメージに基づく職人蔑視とは、奴隷身分あるいは隷属状態への蔑視であって、それが自由人も含む職人全体への蔑視の根拠となっていたとは考えにくい。すなわち、職人蔑視の背景には、奴隷だけでなく自由人職人にも直接当てはまるような性質があると考えべきではないだろうか。

ここで、従来の職人蔑視解釈とその問題点をまとめておく。職人は、外見の貧弱さや、貧民・奉仕者・隷属者としてのイメージが多かれ少なかれ反映された結果、ギリシア世界において蔑視の対象とされた。しかしながら上述の通り、自由人職人に対する蔑視の、古典期アテナイの特徴は、未だ明らかにされていない状況である。そもそも、従来はこのような質の違う蔑視をはっきり区別することなく職人蔑視に関する議論を行ってきたため、蔑視がどの程度一般的であったのかという問題についても、論点が不明瞭であったように思われる。また、職人蔑視を扱った研究ではしばしば、プラトン、アリストテレスなどの哲学者と、非知識人である一般人とを対比しており、哲学者以外の知識人については明確な位置づけがほとんどなされていない⁶⁶⁾。このような状況もまた、職人蔑視を考える上で問題点を曖昧にして

いる原因の一つと考えられる。

本稿の目的の一つは哲学者の見解に偏った職人蔑視解釈⁶⁷⁾を修正することであるため、以下では、哲学者と一般人という従来通りの対比に従って考察する。ただし、哲学者以外の知識人及びその作品については次のように位置づける。まず、クセノポンは広義の哲学者に含める。次に、悲劇・喜劇・弁論は、非知識人への公開を前提としていることから、一般人の価値観が反映されているものとみなす。その他の知識人に関しては、これらのいずれにも分類されないものとする。

ところで、職人蔑視に関する議論において、ほとんどの研究者が言及する「バナウソス」というギリシア語がある⁶⁸⁾。第1章でも述べた通り、「バナウソス」は職人を指す言葉の中でもとりわけ蔑視の意味を含むものとして注目されている。この「バナウソス」という言葉は古典期以降に普及したとされ、この時期に職人蔑視が強まったことへの傍証としてしばしば引き合いに出される⁶⁹⁾。「バナウソス」が古典期以降に普及したことの根拠となっているものには、次の二点が挙げられる。一つは、「バナウソス」が古典期以降の史料にしか見られないことであり、もう一つは、哲学者の作品で「バナウソス」を用いた職人蔑視が多く見られることである。これらに基づき、アテナイでは古典期に一般人の間で蔑視が広がりそれが哲学者の作品に反映された、とする見方が、従来説では前提となっているように思われる⁷⁰⁾。もちろん、哲学者の作品が一般人の価値観を反映しているとする考えに対して、一部では批判的な見解も見られる。例えば、哲学者の思考は純理論的なものであり、一般人のそれとはかけ離れていた、との主張はその代表的なものである⁷¹⁾。あるいは、職人による経済的貢献はポリスにとって必要不可欠であり、それゆえ一般人の間ではある程度職人の立場を認めざるを得なかった、とする見方や⁷²⁾、農民を含む大多数の一般市民が肉体労働に従事する状況下で、職人だけが蔑視されたとは考えにくい、との主張もなされる⁷³⁾。しかしながら、全体的には上述の通り、一般人の間にも職人蔑視が見られ、特に古典期以降に蔑視が強まった、とする解釈が通説となっているように思われる。

では、こうした通説は、職人蔑視を考える上で本当に前提とできるのであろうか。次節では、文献史料に現れる「職人」を指す言葉を分析することによって、「バナウソス」をめぐる議論について検証する。

第2節 文献史料に見る「職人」を指す言葉

第1章で述べた通り、職人を指すギリシア語は複数存在し、本稿ではそのうち主な四つを扱う。まず、前節で問題とした「バナウソス」及びその類義語「バナウシア」「バナウシコス」(以下では、これら三つをまとめて「職人蔑視の言葉」と略す)が用いられている古典期の文献史料を確認すると、これらの語は哲学者作品での用例が多いものの、哲学者以外の作品でも用いられていることがわかる(一覧表を参照)。例えば、ソポクレス『アイアス』には次のような記述が見られる。

一覧表：職人を指す言葉が用いられる回数（前古典期・古典期の文献史料）

作者名	バナウソス以外				バナウソス (バナウシア・バナウシコス)			
	A	B	C	計	A	B	C	計
ホメロス	—	1	1	2	—	—	—	0
ホメロス風讃歌	—	1	—	1	—	—	—	0
ソポクレス	1	—	1	2	—	—	1	1
エウリピデス	—	—	2	2	—	—	—	0
ヘロドトス	—	1	2	3	—	(1)	—	(1)
アリストパネス	4	1	—	5	—	—	—	0
トゥキュディデス	—	2	3	5	—	—	—	0
リュシアス	1	—	—	1	—	—	—	0
イソクラテス	—	1	1	2	—	—	—	0
クセノポン『家政論』	2	1	—	3	(3)	—	—	(3)
プラトン『国家』	17	11	11	39	—	1(2)	—	1(2)
イサイオス	1	—	—	1	—	—	—	0
アイスキネス	2	—	3	5	—	—	—	0
デモステネス	5	—	3	8	—	—	—	0
デマデス	—	—	1	1	—	—	—	0
アリストテレス『政治学』	5	21	4	30	3	24(2)	6	33(2)
テオプラストス	1	—	—	1	—	—	—	0

凡例

- A：手工業者と特定できる使用例
 B：手工業者をも含む、広義の職人
 C：手工業者以外の職人

- ・職人を指す言葉が用いられている作品の執筆年代を基準に作者名を時代順に並べ、太線によって、前古典期・ペロポネソス戦争前・ペロポネソス戦争期以降の三つに区分した。
- ・執筆年代が正確に特定できない作品については、作者の活動時期によって判断した。
- ・ここで「ペロポネソス戦争期以降」とは、ペロポネソス戦争期に活躍したアリストパネス以降とした。
- ・一覧表は、Perseus Digital Library (<http://www.perseus.tufts.edu/hopper/>) をもとに、筆者が作成した。

「メネラーオス いやはや弓兵にしては、大した気位ではないか。

テウクロス そうとも、おれが身につけたこの技が、卑しかりうはずがない。

メネラーオス その手に楯を持たせたら、さぞや大口たたくだらうな。」⁷⁴⁾

ここで「卑しかりう」と訳されている語は、「バナウソス」の初出とされる箇所である。なお、「バナウシア」の初出についてはヘロドトス『歴史』とされている⁷⁵⁾。従って、確かに「バナウソス」及び「バナウシア」は前古典期には確認されていない言葉であると言える。また、職人蔑視は哲学者作品において特に顕著に見られるものの、哲学者以外によっても「バナウソス」として蔑視されることがあったということが、以上の例から読み取れる。

つまり、「バナウソス」を用いた職人蔑視に関しては、必ずしも哲学者の純理論の産物であるとは言えないのである。

しかしながら、ここで注目すべきことが二つある。第一に、哲学者以外によってこのような「職人蔑視の言葉」が用いられる頻度は低い。特に、より一般人の価値観を反映していると考えられる悲喜劇及び弁論において、これらの言葉の用例は極めて少なく、確認されているのは上記のソポクレスの一例のみである。ソポクレスは前5世紀半ばに活躍した人物であり、『アイアス』は彼の現存する七つの作品の中で最も古いとされる⁷⁶⁾。このことを考慮するならば、「職人蔑視の言葉」はいずれも前5世紀後半以降、特にペロポネソス戦争期以降の悲喜劇及び弁論において、全く用いられていないと言える。第二に、そもそも前古典期の史料は、古典期のそれと比べ、非常に少ない。確かに「職人蔑視の言葉」が確認されるのは古典期以降ではあるが、職人を指す他の三つの言葉に関しても、前古典期ではホメロス及びホメロス風讃歌に「デミウルゴス」が計三例見られるのみである。すなわち、古典期以降にしか記述が見られないのは「職人蔑視の言葉」に限らない。従って、古典期以降に蔑視が強まったという従来の前提は、特に一般人の意識を考える上では、根拠が薄いと言わざるを得ない。

では、古典期以降に一般人の間で職人蔑視が広まりそれが哲学者作品に反映された、とする説が成り立たない以上、自由人職人に対する蔑視の古典期アテナイの特徴は存在しない、ということになるのだろうか。ここで再び注目したいのが、悲喜劇及び弁論（以下では、ソポクレスが唯一「バナウソス」を用いた例を除いた悲喜劇及び弁論のことを単に「悲喜劇・弁論」と略す）において職人を指している言葉である。つまり、史料の少ない前古典期に「職人蔑視の言葉」を確認できないことよりもむしろ、比較的史料の多い「悲喜劇・弁論」に「職人蔑視の言葉」が全く現れず、他の言葉が用いられていることの方に大きな意味を見出すべきであるように思われる。次節ではこの点を中心に考察した上で、一般人における職人蔑視の実態について、一つの結論を導き出す。

第3節 職人蔑視の実態

「悲喜劇・弁論」で「職人蔑視の言葉」が全く用いられていないという状況を説明するためには、どのような理由が考えられるだろうか。ここで、次の三つの仮説を立てることができるようになる。第一の仮説は、「バナウソス」「バナウシア」「バナウシコス」といった語は公的な場では使用されない種類の言葉であった、というものである。第二の仮説は、「バナウソス」の意味が「デミウルゴス」など他の言葉に吸収されている、というものである。そして第三の仮説は、職人全体を「バナウソス」として蔑視することに一般人が抵抗を感じていた、というものである。

しかしながら、第一の仮説に関しては、ソポクレスの悲劇で「バナウソス」が用いられていることと矛盾する。この箇所では文脈をたどる限り、公的な場で使用すべきでない言葉

をあえて使っているわけではなさそうである。従って、少なくともソポクレスの時代には、「職人蔑視の言葉」は公的な場で自然に用いられ得る言葉であったと考えられる。

次に、第二の仮説に関しては、「バナウソス」以外の言葉はそれ自体に蔑視の意味を持たないことを想起すべきである。つまり、職人全体を蔑視する意思があるにもかかわらず「バナウソス」を全く用いず、あえて他の言葉に置き換えるという現象が起こっていたとするならば、そのこと自体やはり不自然であり、何らかの意味が存在すると考えられる。従って、この仮説だけでは根本的な説明は不十分であると言える。また、実際に「悲喜劇・弁論」において職人を指す言葉が用いられている箇所を確認しても、職人全体に対する蔑視は読み取れないことから、おそらく第二の仮説も成り立たないものと思われる。

以上を踏まえると、第三の仮説が最も有力であると考えられる。もちろん、ソポクレスが「バナウソス」を用いていることはここでも考慮されるべきである。ただし、ソポクレスの活動時期が前5世紀半ば頃であることから、特にペロポネソス戦争期以降については、この説が成り立つと言える。つまり、これらをまとめると、ペロポネソス戦争期以降の社会的状況において、職人全体を「バナウソス」として蔑視することに抵抗を感じていた一般人像が導き出される。

ペロポネソス戦争がアテナイ社会に与えた影響は非常に大きかったと考えられるものの、それまで頻繁に用いられていた言葉が戦争を契機として突然消えてしまうというのは、少し不自然であるかもしれない。とするならば、それ以前から徐々に「バナウソス」が用いられなくなっていた状況を想定すべきであるように思われる。悲喜劇や弁論において「職人蔑視の言葉」が用いられているのが、古典期でも比較的古い時代に書かれたこの一例のみである以上、このような想定は矛盾なく受け入れられよう。

すなわち、「職人蔑視の言葉」は、古典期に入り時代が下るにつれ、一般人の間では使われなくなっていった可能性が高い。これは、一般人における職人蔑視が質的に変化したことを意味するように思われる。では、なぜ一般人は「職人蔑視の言葉」を用いた職人蔑視に抵抗を感じるようになったのだろうか。言い換えるならば、一般人における職人蔑視に質的な変化をもたらした社会的要因とは、どのようなものであったのだろうか。

ここで大きな意味を持つと考えられるのが、第3章で導き出された、古典期に入りポリスと職人との関係が変わったことに伴う、人々の職人に対する意識の変化の可能性である。職人たちは従来「職人の世界」に位置する、一般市民にとって異質な存在であったにもかかわらず、古典期には次第に一般市民の中に溶け込んでいった。このような現象が見られるようになる時期は、一般人において「職人蔑視の言葉」が用いられなくなっていくと考えられる時期とまさに一致しているのである。これらを総合すると、職人が一般市民の世界に接近するにつれて、それ以前には存在していたはずの「ある種の蔑視」が薄れている状況が浮かび上がってくる。すなわち、「ある種の蔑視」とは、「職人の世界」への不信感によって生み出された、職人全体に対する蔑視であったと考えられる。

以上より、一般人における職人蔑視がたどった経緯は次のようにまとめることができる。「職人の世界」は一般市民にとって異質な存在であり、それゆえ職人たちは古くから疑わしいものと認識されていた。そしてそのような状況を反映して、「バナウソス」「バナウシア」「バナウシコス」という言葉によって職人全体が蔑視された。ところが、古典期に入り、職人たちが一般市民の中に溶け込み、ポリスの構成要素として受け入れられていった。それに伴い一般市民において職人への不信感が薄れていき、その結果、「職人蔑視の言葉」が一般人の間で用いられることは少なくなっていった。特にペロポネソス戦争期以降には、職人全体に対する蔑視はほとんど見られない状態であった。つまり、一般人における職人蔑視の実態としては、古典期以降に蔑視が強まったとする通説とは逆の状況を想定すべきである。そしてこのような蔑視の変質こそ、職人蔑視の古典期アテナイの特徴として位置づけられよう。

ここで、本稿ではその他の知識人とした人々の作品、すなわち、「悲喜劇・弁論」以外の作品に目を向けると、これらのうち「職人蔑視の言葉」が用いられているのは、ヘロドトス『歴史』のみであることがわかる。上述の通り、古典期アテナイにおいては、このような「職人蔑視の言葉」は次第に用いられなくなっていった。しかしながら、周知の通り、ヘロドトスは小アジアの出身であり、同書をイオニア方言で記述している。従って、彼の作品中に「職人蔑視の言葉」が用いられていることは、古典期アテナイの職人が置かれた状況の特殊性を考慮すれば、自然なこととして理解できるように思われる。

ではこれらに対し、哲学者の作品に「職人蔑視の言葉」が数多く見られる理由は、どのように解釈すべきであろうか。もちろん、哲学者による職人蔑視にも一般人におけると同様、様々な要因があると考えられる。その中には哲学的解釈を必要とするような純理論的なものも含まれる⁷⁷⁾。また、労働を美德とするか否かなど、哲学者によって見解が異なる場合もある⁷⁸⁾。このように、哲学者作品に見られる職人蔑視は極めて複雑な諸要素から成り立っているため、その全容を明らかにすることは困難であり、かつ本稿の趣旨からは外れている。従って本稿では、哲学者における職人蔑視の一要素について、アリストテレス『政治学』、プラトン『国家』、クセノポン『家政論』の三作品を取り上げて考察するにとどめる。

哲学者が職人を蔑視した理由を考える上で、最も注目に値するのが、哲学者作品の中でも圧倒的に多く「職人蔑視の言葉」を用いている、アリストテレスの『政治学』である。ここではそのうち二例を挙げる。

「彼らは、その名がまさしく示すとおり、手を使ってその日暮らしをする者である。そのなかには手職人も含まれる。まさしくこの理由によって、ある国々では、民主制がその最終段階に達する以前のむかしは、職人階層は公職に参加することはなかったのである。」⁷⁹⁾

「これに対してその他の民衆は、民主制の構成員となる場合、ほとんどすべて、彼らよりはるかに劣る。その生活は品位に欠け、また、職人であれ、商人であれ、賃金労働者であれ、彼ら群衆が従事する仕事のどれひとつとして徳性をともなうものはない。しかも、アゴラや町の中心部あたりをたえず行き来するために、こうした種類の連中は、ほとんどみな民会に出席するのは容易である。」⁸⁰⁾

これらの記述からは、職人が国政に参加している現状に対する、アリストテレスの批判的見解が読み取れる。従って、アリストテレスによる職人蔑視を検討するためには、彼が理想とする国家において、職人がどのように位置づけられているかという問題について確認する必要がある。アリストテレスは同書において、「徳」を有する者が公職に就く国家を理想としている。そして、彼が考える最善の民主政においては、そのような有徳者を選出する民衆として最もふさわしいのは、農民であった。ところが、これに対して職人は、「徳」を備えているとは言えない存在であり、また、民衆としても劣る者であるとみなされている⁸¹⁾。以上を踏まえると、アリストテレスによる職人蔑視は、次のような理由によるものであったと思われる。すなわち、アリストテレスは、職人たちが国政の担い手として、特に農民に劣る者であることを示すため、さらには、現実には職人が政治に参加しているという状況を批判するために、「職人蔑視の言葉」を用いたのではないだろうか。

一方、プラトン『国家』において「職人蔑視の言葉」が用いられている回数は、職人を指す他の三つの言葉のそれと比べ、はるかに少ない。ここでは、「バナウシア」が用いられている二例を挙げる。

「彼らは、もともと生まれつきの素質が不完全であるうえ、ちょうどその身体が職業的技術によっていためつけられているのと同じように、その魂もまた、下賤な仕事のためにすっかりいじけて、片輪になっているのだ。」⁸²⁾

「また下賤な手細工仕事や手先の仕事といったものが、なぜ不名誉なものとされると思うかね？それはほかでもない、その人がもっている最善の部分が生まれつき弱くて、自分の内なる獣たちを支配する力がなく、仕えることしかできないようになっていて、ただ獣たちにへつらうことだけしか学ぶことができないような場合、ただそのことのためであると、われわれは言うべきではなからうか？」⁸³⁾

プラトンが同書で「職人蔑視の言葉」を用いている全ての箇所において、以上の例にも見出されるように、職人の内面の脆弱性が問題とされている。これに対し、職人を指すその他の言葉については、用例が多いにもかかわらず、このような内面に関する文脈で用いられている例を確認することができない。これらを考慮に入れると、「職人蔑視の言葉」が用いら

れている背景には、プラトンの特定の意図を見出すことができるように思われる。すなわち、彼は、内面の脆弱性の問題を、職人に関するその他の論点以上に強調するために、このような言葉を用いたのではないだろうか。

最後に、クセノポン『家政論』の例を挙げる。

「実のところ、我々はあらゆる技術をまなぶことは出来ないと思った。そして諸都市と同様にいわゆる職人の技術に賛成しないのだ、なぜなら、それは体を蝕み心を委えさせられると思われるからだ。」⁸⁴⁾

クセノポンが同書において「職人蔑視の言葉」を用いているのは、この例及び、本章第1節に挙げた例の、計三箇所である。これらを見る限り、クセノポンもまたプラトンと同様、内面の脆弱性に言及するに際して「蔑視の言葉」を用いていると言える。

以上によって確認されたように、職人たちは、アリストテレスにとっては国政の担い手にふさわしくないという点で、プラトンやクセノポンにとっては内面の脆弱性という点で、他の者よりも卑俗な者として位置づけられるべき存在であった。「職人蔑視の言葉」は、このような議論を展開する上で都合な言葉として、哲学者たちによって採用されたのではないだろうか。当然、彼らが職人をこのように位置づけた思想的背景については、個別に考察する必要がある。しかしながら、少なくとも、これらは本章で確認した一般人の蔑視の実態とは別の、特殊な用例であるとみなすことができよう。

おわりに

本稿では、「職人の世界」の存在を示すことによって、職人蔑視の実態について一つの解釈を試みた。そして、本来異質であるはずの「職人の世界」が古典期アテナイにおいては一般市民の世界に接近し、その結果職人への不信感が薄れていったことを明らかにした。

しかしながら、この現象は「職人の世界」の解体を意味しない。古典期アテナイにおいても、職人は「職人の世界」に位置し、自由に移動し得る存在であった。また、異質な世界が接近するに際して一般人が職人を受け入れることは、決して必然ではなかった。つまり、逆に職人への蔑視が強まることも起こり得たと考えられる。それにもかかわらず、実際には職人全体への蔑視は薄れていった。このことは、「職人の世界」との接触を通して、他者に対する人々の認識が寛容になっていったことだけではなく、そもそも「職人の世界」を受け入れた一般人の意識が、排他的ではないという意味で、外に開かれた意識であった、ということをも意味すると言える。

古典期アテナイの特徴は、ペリクレスの市民権法制定以降、市民団の閉鎖性に見出されてきた。その一方で、「職人の世界」を受け入れた開放性もまた、古典期アテナイには確かに

備わっていた。この開放性は、一般市民たちが、市民団という枠組みの中にのみ閉されていたのではなく、より広い枠組み——ここでは具体的には、市民権の有無にかかわらず、日常生活を共にし、政治的関心をも共有し得る人々によって構成される枠組み——の中にも自分たちを位置づけていたからこそ存在したと考えられる。特に、ペロポネソス戦争後に市民団の枠組みを再強化する政策がとられた⁸⁵⁾ことと、「職人の世界」の受け入れによって職人に対する不信感が薄れていったことは、一見矛盾するようでありながら、実際には同時に進行していた。すなわち、市民権が強化された、まさにその時代においてすら、人々は市民意識の中にのみ閉鎖されていたわけではなかったと言える。言い換えるならば、アテナイ、さらには古代ギリシアのポリスを構成していた人々の意識を考える際には、市民権だけを絶対的な指標とするのではなく、彼らが自身を位置づけていた、より広い枠組みの中でとらえる必要がある。

最後に、課題と展望を述べておく。集団としての一般市民が、市民団より広い枠組みの中に自分たちを位置づけていたということは、個々の市民は、それ以上に広い世界の中に位置づけられる可能性が高い。「職人の世界」の中に市民職人が含まれていたことは、その一例を示していると言えよう。本稿では手工業者に考察を限定したが、その他の非農業従事者、例えば商人や傭兵⁸⁶⁾なども、それぞれ「職人の世界」に類似する世界を形成していたと考えられる。このような職業人についても今後さらに研究が進められることによって、アテナイ、さらにはギリシア世界において、人々が自己を位置づける上でどのような枠組みを設定し得たのか、市民権にとらわれない理解が可能となると筆者は考える。

註

史料名等の略記は *The Oxford Classical Dictionary* に準ずる。

- 1) メトイコイについては、D. Whitehead, *The Ideology of the Athenian Metic*, Cambridge, 1977. 邦語では、馬場恵二「アテナイの市民とメトイコイ」石母田正ほか編『古代史講座7 古代社会の構造(下) —古代における身分と階級』学生社、1963年、48-79頁。伊藤貞夫、本村凌二編『西洋古代史研究入門』東京大学出版会、1997年、63-65頁。また、レイトゥルギアにメトイコイが関与した意味を分析したものとして、片山洋子「レイトゥルギアの社会的意味—メトイコイの関与の点から」『西洋古典学研究』18、1970年、40-51頁。
- 2) M. Balme, *Attitudes to Work and Leisure in Ancient Greece*, *G&R* 31, 1984, pp. 140-152. 特に p. 141 を参照。また、Hdt. 2. 167 には、職人蔑視が最も強いのはスパルタ、最も弱いのはコリントス、とする記述がある。
- 3) V. Ehrenberg, *The People of Aristophanes : A Sociology of Old Attic Comedy*, Oxford, 1951, p. 113; A. Burford, *Craftsmen in Greek and Roman Society*, London, 1972, p. 29. 初期アテナイ社会の職人については、藤縄謙三『ギリシア文化の創造者たち—社会史的考察』筑摩書房、1985年、48頁。都市部の魅力については、R. Osborne, *The Potential Mobility of Human Populations*, in id., *Athens and Athenian Democracy*, Cambridge, 2010, pp. 139-167. 特に p. 160 を参照。
- 4) P. Chantraine, *Trois noms grecs de l'artisan*, in *Mélanges de philosophie grecque offerts à Mgr. A. Diès*, Paris, 1956, pp. 41-47.
- 5) 村川堅太郎「デーミウールゴス」『史学雑誌』64、1955年、987-1020頁。(『村川堅太郎古代史論

集Ⅰ古代ギリシアの国家』岩波書店、1986年、239-278頁に再録。）村川氏によれば、「デミウルゴス」という言葉は、ボリス成立前のギリシア人社会に一元的起源を持ち、手工業者、詩人、預言者、伝令など、幅広い対象を指した。特に、伝令の中には、共同体にとっての重い任務を果たす者も含まれていたという。これが、西方方言群において高官を指すなど語源通りの意味を残したのに対し、イオニア・アテナイにおいては手工業者の意味を強めた。村川氏は、後者において手工業が発展し、共同体の中での手工業者の重要性が早くから生まれたことを、その理由として推測している。なお、本稿におけるギリシア語表記については原則として長母音を省略した。

- 6) 伊藤貞夫『古典期のボリス社会』岩波書店、1981年、45頁、註29。
- 7) 加来彰俊ほか訳『デモステネス弁論集2』京都大学学術出版会、2003年、281頁。
- 8) 藤縄、前掲書、62頁。
- 9) 例えば、村川、前掲論文、1014頁。Chantraine, *op. cit.*, p. 47; P. Vidal-Naquet, *The Black Hunter: Forms of Thought and Forms of Society in the Greek World*, Baltimore, 1986, p. 229.
- 10) Vidal-Naquet, *op. cit.*, p. 228; 豊田和二「古代ギリシア人の技術観—その進歩と停滞への心性」『社会科学討究』33, 1987, 719-748頁。特に、720-723頁。S. Cuomo, *Technology and Culture in Greek and Roman Antiquity*, Cambridge, 2007, pp. 7-40. 特に p. 9 では、テクネを定義する際の問題点にも言及している。
- 11) デミウルゴスが、手工業者より広い対象を指し得る言葉であったことについては、村川、前掲論文。藤縄、前掲書、47頁。Vidal-Naquet, *op. cit.*, p. 229. 村川氏の議論については、本稿註5を参照。なお、本稿第4章に挙げた一覧表は、手工業者を指すか否かによって、職人を指す言葉を分類している。ここでCに分類されるものの例としては、伝令、弁論家、医者、養蜂家、俳優、演奏家などが挙げられる。本稿での「職人」の定義に含まれるのはAとBであるものの、これらCに分類される職業のうち多くは、広義の職人に含むことができると考える。また、Cに対して「バナウソス」「バナウシア」「バナウシコス」が用いられている場合であっても、「バナウソス」の語源が「炬」であることから、これらが用いられる背景には、手工業者に対する蔑視があったと言える。なお、Bに関しては手工業者を念頭において議論することが可能であると考えられるが、素人に対する「専門家」、軍人以外の職業、下層民などといった意味で用いられている例が示すように、その対象が必ずしも手工業者のみに限定されるわけではない点を考慮し、Aとは区別して分類した。
- 12) Ehrenberg, *op. cit.*, pp. 124-126 において言及されているような、製作したものを自ら販売するという点では商業にも従事している者についても、手工業者である限り、この定義に含むものとする。
- 13) Whitehead, *op. cit.*, pp. 116-121.
- 14) 反寡頭派戦争という言葉については、桜井万里子「「反寡頭派戦争」の帰結とアテナイ社会—前403年の「和解協定」をめぐる」『西洋古典学研究』40, 1992年、22-32頁に拠った。
- 15) P. Krentz, *Foreigners against the Thirty: IG 2²10 Again*, *Phoenix* 34, 1980, pp. 298-306.
- 16) 桜井万里子「古典期アテナイにおける市民にとっての他者—その他者認識の変容とトラシュプロスの第1決議」『歴史学研究』594, 1989年、46-63頁。特に、59-61頁。また、篠原道法「古典期アテナイにおける住民概念としてのアストス—成員の閉鎖性をめぐって」『史林』92, 2009年、797-829頁は、市民と非市民との社会関係に注目し、ボリスの閉鎖性をアテナイの特徴とする見解を再考する。篠原氏はその際、血縁概念と住民概念という二つの用法が見出される言葉である「アストス」に着目し、前5世紀末を転換点として、アテナイが「血縁共同体」から「ノモス共同体」へと変容した可能性を指摘する。
- 17) 例えば、Ehrenberg, *op. cit.*, pp. 113-146; E. Ch. Welskopf, *Free Labour in the City of Athens*, in P. Garnsey (ed.), *Non-slave Labour in the Greco-Roman World*, Cambridge, 1980, pp. 23-25.
- 18) E. M. Harris, *Workshop, Marketplace and Household: The Nature of Technical Specialization in Classical Athens and Its Influence on Economy and Society*, in P. Cartledge, E. C. Edwards, and L. Foxhall (eds.), *Money, Labour and Land: Approaches to the Economies of Ancient Greece*, London, 2002, pp. 67-99.
- 19) *Ibid.*, pp. 68-70.
- 20) *Ibid.*, pp. 74-75.

- 21) K. Vlassopoulos, *Free Spaces: Identity, Experience and Democracy in Classical Athens*, *CQ* 57, 2007, pp. 33-52.
- 22) Ibid., p. 41. 従って、アテナイの政治家は、自身の政治的指針を実行するためには、貧しい労働者、職人、店経営者、行商人、小作農といった人々と毎日交流する必要があった、とする。
- 23) B. R. MacDonald, *The Emigration of Potters from Athens in the Late Fifth Century B. C. and Its Effect on the Attic Pottery Industry*, *AJA* 85, 1981, pp. 159-168.
- 24) 芳賀京子「越境するアテナイ人彫刻家」『西洋美術研究』14, 2008 年, 12-32 頁。
- 25) R. H. Randall, *The Erechtheum Workmen*, *AJA* 57, 1953, pp. 199-209.
- 26) A. Burford, *The Builders of the Parthenon*, *G&R* 10, 1963, pp. 23-35.
- 27) Burford, *op. cit.*, p. 154.
- 28) C. Feysel, *Les artisans dans les sanctuaires grecs aux époques classique et hellénistique à travers la documentation financière en Grèce*, Athènes, 2006.
- 29) フェリエルの説については、H. Philipp, Review of: C. Feysel, *Les artisans dans les sanctuaires grecs aux époques classique et hellénistique à travers la documentation financière en Grèce*, *Gnomon* 82, 2010, pp. 344-352; M. C. Scott, Review of: C. Feysel, *Les artisans dans les sanctuaires grecs aux époques classique et hellénistique à travers la documentation financière en Grèce*, *JHS* 127, 2007, pp. 229-230 を参照。
- 30) 伊藤, 前掲書, 36-67 頁。
- 31) 同書, 50-51 頁。
- 32) Randall, *op. cit.*, p. 199; Burford, *op. cit.*, pp. 24-25; 伊藤, 前掲書, 36-37 頁。ただし、バーフォードはその限界にも言及する。
- 33) 村川, 前掲論文, 1013-1018 頁。本稿註 5 参照。
- 34) 藤縄, 前掲書, 63-64 頁。
- 35) 豊田和二「アゴラの発掘にみる工人の生活」『史観』116, 1987 年, 16-33 頁。(以下「アゴラの発掘」と略す。)
- 36) Cuomo, *op. cit.*, pp. 35-40.
- 37) 特にわが国では、それぞれの研究者が個別に欧米の研究に依拠している状況にあり、職人について学説らしいものはほとんど見当たらない。なお、職人研究における問題点について概説したものとしては、古山正人「古代ギリシアのポリスと商手工業」『国学院雑誌』109, 2008 年, 184-203 頁。
- 38) 高島純夫「ソクラテスの場合—前五世紀アテナイにおける一知識人の人間関係」『東洋大学文学部紀要 史学科編』27, 2001 年, 123-170 頁。特に 125-135 頁を参照。
- 39) 豊田「アゴラの発掘」, 30-31 頁, 註 37. Burford, *op. cit.*, p. 130.
- 40) 後世の叙述ではあるが、Diog. Laert. 2. 13. 122 によればシモンはアテナイ人であった。
- 41) 豊田「アゴラの発掘」, 23 頁。河底尚吾「古代ギリシアの職人奴隷—アリストパネエスの奴隷たち」『横浜経営研究』11, 1990 年, 1-8 頁, 特に 3 頁。
- 42) 豊田「アゴラの発掘」, 22 頁, 及び 30 頁, 註 32。呪詛銘板の字体は前 4 世紀のものとみられるという。
- 43) Harris, *op. cit.*, p. 70.
- 44) Vlassopoulos, *op. cit.*, pp. 40-42.
- 45) Krentz, *op. cit.*, p. 305.
- 46) L. Neesen, *Zur Rolle und Bedeutung der produzierenden Gewerbe in antiken Städten*, *AncSoc* 22, 1991, pp. 25-40.
- 47) 藤縄, 前掲書, 37 頁。
- 48) Randall, *op. cit.*, p. 203.
- 49) Burford, *op. cit.* p. 25.
- 50) MacDonald, *op. cit.*, pp. 159-163.
- 51) 芳賀, 前掲論文, 26-28 頁。
- 52) Burford, *op. cit.*, pp. 66-67; 豊田和二「ベルシア王宮造営と東方ギリシア人—資料からみたギリシア人職人の存在とその状況」『西洋史学』121, 1981 年, 36-50 頁。

- 53) 同論文, 50 頁。
- 54) 豊田「アゴラの発掘」, 24 頁。
- 55) Burford, *op. cit.*, p. 155.
- 56) 古山, 前掲論文, 187-188 頁。
- 57) Xen. *Oec.* 4. 2-3. 以下, 本書の訳文はすべて, 越前谷悦子訳『オイコノミコス一家政について』リーベル出版, 2010 年より引用。なお, この箇所ではソクラテスの言葉としてクセノポンによって職人蔑視の理由が述べられているが, 本稿で挙げた通り職人蔑視には複数の要素があると考えられるため, ここで言及されているものは当然その中の一部にすぎない。
- 58) Welskopf, *op. cit.*, p. 24; Balme, *op. cit.*, pp. 150-151 は農民の忙しさを挙げ, このような説明の矛盾を指摘する。
- 59) 藤縄, 前掲書, 61-62 頁。
- 60) Cuomo, *op. cit.*, p. 10 は, いくつかの壺絵に見られる職人の姿が, むしろ美しいものとして描かれていることを指摘する。
- 61) 本稿第 2 章第 2 節及び註 34 参照。
- 62) R. Mondolfo, *The Greek Attitude to Manual Labour*, *P&P* 6, 1954, pp. 1-5. 特に p. 5; 村川, 前掲論文, 1014 頁。伊藤, 前掲書, 42 頁。
- 63) Arist. *Pol.* 1278a. 以下, 本書の訳文はすべて, 牛田徳子訳『政治学』京都大学学術出版会, 2001 年より引用。
- 64) 大規模製作場については, 伊藤, 前掲書, 5-35 頁。特に 18 頁, 32 頁参照。
- 65) 河底, 前掲論文, 2-4 頁では, 鍛冶工や靴職人の多くが自由人であったとしている。また, 市民職人の存在を認めている研究の例として, 伊藤, 前掲書, 38 頁, 46 頁, 59 頁, 註 21。Balme, *op. cit.*, p. 146; Harris, *op. cit.*, p. 70; Cuomo, *op. cit.*, p. 10 が挙げられる。
- 66) 軍人でありながらソクラテスの弟子であったクセノポンは, 哲学者に含まれる場合も一般人に含まれる場合も見受けられる。例えば, Mondolfo, *op. cit.*, pp.1-5 では哲学者に含んでいるが, 伊藤, 前掲書, 39 頁では一般人の価値観を反映するものとしている。
- 67) その最大の原因は, 一般人の価値観を示す史料の少なさにある。なお, Balme, *op. cit.*, pp. 141-143 では, このような史料状況を補うため, ホメロスやヘシオドスなど前古典期の作品に注目する。
- 68) 例えば, Balme, *op. cit.*, pp. 146-147; 藤縄, 前掲書, 62 頁。Cuomo, *op. cit.*, pp. 9, 10-11, 31.
- 69) 伊藤, 前掲書, 45 頁, 註 29。Cuomo, *op. cit.*, p. 10 は, 奴隷制との関係には言及しないものの, バナウソスを前 5 世紀以降に発展した言葉とする点には肯定的であり, その背景に何らかの政治的变化があったとする。
- 70) 伊藤, 前掲書, 42 頁。豊田和二「前古典期ギリシアにおける手工業者の地位と機能」『西洋史論叢』6, 1985 年, 1-15 頁。(以下「前古典期ギリシア」と略す。) 豊田氏は奴隷制の影響に加え, 屋内に籠りきりの職人たちは戦士たる市民としてふさわしくない, ということを蔑視の理由として挙げる。
- 71) Balme, *op. cit.*, p. 150. なお, Mondolfo, *op. cit.*, p. 5 は, 職人蔑視が一般的であったという説には根拠がないと指摘する。
- 72) Mondolfo, *op. cit.*, p. 1.
- 73) Balme, *op. cit.*, pp. 141-150 特に pp. 148-150; Mondolfo, *op. cit.*, pp. 1-2 では, 肉体労働に対する好意的な態度の存在を指摘し, クセノポン, プラトン, アリストテレスですらその影響を受けていた, と主張する。
- 74) Soph. *Aj.* 1120-1122. 訳文は, 木曾明子, 竹部琳昌, 大芝芳弘, 片山英男訳『ソボクレーヌ 2』(ギリシア悲劇全集 4) 岩波書店, 1990 年, 72 頁(『アイアス』の訳者は木曾明子氏) より引用。
- 75) 職人を指す言葉の初出については, K. Murakawa, *Demiurgos*, *Historia* 6, 1957, p. 407, n. 1; 村川, 前掲論文, 1020 頁, 註 7 参照。
- 76) 松平千秋, 久保正彰, 岡道男編『ギリシア悲劇全集 別巻』岩波書店, 1992 年, 86 頁, 118-129 頁。
- 77) Mondolfo, *op. cit.*, pp. 2-5; Vidal-Naquet, *op. cit.*, pp. 224-245; A. W. Nightingale, *Spectacles of Truth in Classical Greek Philosophy: Theoria in Its Cultural Context*, Cambridge, 2004, pp. 123-127. ナイチン

ゲールは、プラトンが定める「バナウソス」的な精神は、下層民だけでなく上層民にも見出されると述べる。

78) 豊田「前古典期ギリシア」, 2 頁。

79) *Arist. Pol.* 1277a-1277b.

80) *Arist. Pol.* 1319a.

81) *Arist. Pol.* 1318b-1319b; 岩田靖夫『アリストテレスの政治思想』岩波書店, 2010 年, 15 頁, 74-77 頁。岩田氏によれば, 最善の民主政における民衆としてふさわしいのは農民であるとするアリストテレスの見解は, 次のように説明できる。農民である市民は, 参政権を有するものの, 農作業に忙しいため民会に出席することができない。しかしながら, 彼らは政治に無関心ではなく, 公職者の選挙と執務審査の権限を持つ。従って, 農民を主体とする民主政においては, 一方で公職者は, 執務審査が存在するために私欲に走ることがなく, さらに, 自分たちより劣ったものによって支配されないことに満足し, 他方で民衆は, 自らが選出した有徳者によって支配されることに満足する, という, 両者の協調が成立する。これに対し職人は, 町に住み, 政治に口を出したがる存在であるとされる。

82) *Pl. Resp.* 495d-495e. 以下, 本書の訳文はすべて, 藤沢令夫訳『国家』(下) 岩波書店, 1979 年より引用。

83) *Pl. Resp.* 590c.

84) *Xen. Oec.* 6.5.

85) *Athen.* 13. 577b-577c; Whitehead, *op.cit.*, p. 158, p. 172, n. 94; 伊藤, 前掲書, 398 頁, 400 頁, 註 10, 431-435 頁。

86) ポリス社会のアウトサイダーとしての商人, 傭兵については, P. マケクニー (向山宏訳)『都市国家のアウトサイダー—ポリスから古代帝国へ』ミネルヴァ書房, 1995 年。なお, その大部分をバーフォードに依拠しているものの, マケクニーは同書, 177-183 頁において移動する職人にも言及している。

《English Summary》

A Reconsideration of Contempt for Craftsmen in Classical Athens

Hinako SUGIMOTO

Since the majority of citizens in Ancient Greece were farmers, most craftsmen were either foreigners or slaves. Consequently, craftsmen were despised by their contemporaries, notably by philosophers such as Xenophon, Plato, and Aristotle. There were, however, a small number of citizen craftsmen.

In this paper, the author first analyzes craftsmen in terms of their mobility. Craftsmen were able to move freely from one polis to another, and they were equally able to stay in any one polis as long as was needed. In other words they occupied *the world of craftsmen*.

The author then discusses the notable word, *banausos*, which specifically expresses contempt for craftsmen, but which was used mostly by the philosophers among writers in classical Athens. According to this analysis, it appears that general citizens despised craftsmen due to their distrust of *the world of craftsmen*.

Many craftsmen were able to communicate with the general citizens in classical Athens, and as they developed a closer relationship, traditional distrust gradually began to fade. It is often said that the Athenian polis was based on exclusivity, but at the same time it appears to have been possible for citizens to feel a close affinity with "outsiders" such as the residents of *the world of craftsmen*.